

共観福音書における身障と疾病

Disabled Persons and Diseases in the Synoptic Gospels

新谷 光二

Koji Atarashiya

ABSTRACT

Descriptions about disabled persons and disease are widely found everywhere in the Synoptic Gospels except special sections such as on the birth, the cross, the resurrection and the ascension of Jesus. It is told to us that the healing of suffering from every disease and disabled condition is especially important in the message of the gospel.

The disabled persons who appear in the Synoptic Gospels include the blind, dumb, deaf, lame, crippled and a person with a withered arm. Also, the diseases described include leprosy, epilepsy, paralysis, dropsy, sterility and women's diseases. At that time, every body thought that diseases especially mental diseases were caused by demons. And it was considered normal to think that the disability was caused by the sin of the person or ancestors. The Jewish community ostracized lepers: thus Jesus took a serious view of healing them.

Of course, Jesus heals sickness, raises the dead, cleanses lepers and drives out demons by his prayer and faithfulness. Jesus did not use a medical treatment except a mud ointment and finger techniques. Jesus heals fairly, any man or woman without discrimination.

In this paper today's messages from the Synoptic Gospels about handicapped or sick persons are discussed.

Key Words: the Synoptic Gospels, disabled persons, disease, healing, leper, without discrimination

I はじめに

共観福音書のマタイは1～28章、マルコは1～16章、ルカは1～24章より成り立っている。マタイの1～3章は、イエス・キリストの生誕と洗礼者ヨハネからの受洗等の記述であって、イエスの宣教活動は4章からである。また、26章の後半からはイエスの十字架と復活の記述である。マルコは1章からイエス・キリストの福音が述べられ、締めくくりの14章以下はマタイ同様イエスの受難と栄光に当てられている。ルカでは1～3章が洗礼者ヨハネ並びにイエス・

キリストの誕生の次第を述べ、両者の係わりとイエスの系図などが記述されている。また、22～24章は他の2福音書と同様に十字架と復活の記事である。即ち、生誕や十字架、復活、昇天の記載を除くイエス・キリストの福音宣教活動は、マタイでは4章から25章まで、マルコでは1章から13章まで、ルカでは4章から21章までとなる。これらの章節には後述の一部の箇所を除き、身障と疾病に関する記述は至る所に表われ、これらが人生の最大関心事であったことを物語っている。したがって、福音宣教において

も、これらの苦悩からの解放、癒しが重大な事項であったと考えられる。

この論文では、マタイ、マルコ、ルカ3共観福音書における身障と疾病に関する記述の実態を明らかにし、そこから今日的課題を得ようとするものである。

II 身障と疾病に関する語彙・成句

身障と疾病に関する記述には挿話ごとに深刻な事情があり、キリスト教の教理・信条に照らして重要な内容を含むものも多いが、単純に語彙・成句に限って、抄出、整理をしてTableに示した。聖書は新共同訳を用い、最初に各書章節、続けて()内に聖書に表れる内容小見出しを挙げ、その後に語彙・成句を記した。並行記事がある場合は、横の同一欄に同様に示した。なお並行記事はあるが、そこに身障・疾病の語彙・成句がない場合には章節のみを示し、以下は空欄とした。これはナザレでは受け入れられないとの記述の場合では、ルカ4章16～30節のみの本題に関係のない挿入の部分、また、神殿から商人を追い出すのくだりでは、マタイ21章12～22節のみの同様の挿入などに見られる。勿論、章節の記述もない空欄は並行記事がないことを示している。Tableの記述の順は原則として章節の順に示した。マルコ、ルカの並行記事については順不同になっている。

身障と疾病の記述の抄出個所として表れない章節は前述の生誕、十字架等の章節の他に、山上の説教であるマタイ5～7章、たとえ話が中心であるマタイ18～19章、マルコ4章、ルカ12章、ルカ15～16章、説教、問答並びにたとえ話を含む問答の個所であるマタイ16章、マタイ23章、マルコ12章、ルカ20章などである。これら以外の各章節には表に示されるように身障と疾病の記述は広く表れる。

一般の民衆にとっては、身障、疾病の苦悩については癒されること、完治することこそが中

心命題であった。従って、癒し、癒されるという具体的行動を伴わない言説には身障、疾病などは例示されていないのではないかと考えられる。実際イエスが説教や問答において疾病のことを取り上げている場合は少なく、故郷ナザレで預言者は受け入れられないとのくだり(ルカ4章・これは旧約の引用である)に、「目の見えない人」と「らい病を患っている人」との記述があり、また、昔の人の言い伝えとして、「盲人が盲人の道案内ができようか」と説く個所(マタイ15章)のみである。いずれも並行個所がありながら、特定の福音書のみ表れることから、編集者の特別な意図による部分と見做したい。なお、マタイの場合は、23章にも「ものが見えない案内人」として表れるが、この記述は身障者よりは健常者の無理解をいっていると解釈される。山上の説教などでも、「悲しむ人は、迫害される人は、悪口を浴びせられるときは幸いである」(マタイ5章)とあり、これには勿論、疾病、身障によるものも包括されていると考えられるが、あくまで抽象的表現に止まり具体性のある身障、疾病の問題などは表れない。

表れる具体的疾病名はてんかん、らい病、中風、長血(表現は別である)、不妊、水腫(ハンセン病の症状か)であり、他に色々な病氣と書かれていて、病名の特定できないもの、特に精神疾患を思わせるもの、単に病氣、病人と出てきたり、発熱、疫病など症状や一般的呼称(総称)も表れる。また、身障については、盲人、口の利けない人、耳の聞こえない人、足の不自由な人、手の萎えた人、体の不自由な人、腰の曲がった人等が表れる。これらを通じて明瞭なことは、目に見える異常、確認の容易なそれのみをいっていて、当時の非科学的医学知識からは致し方のないことである。

3福音書の並行記事については表現の異同は見られるものの、互いに敷衍、補完される部分が多く、相互の大きな矛盾は見出せない。

共観福音書における身障と疾病

Table Disabled Persons and Diseases etc as found in the Synoptic Gospels

マタイ	マルコ	ルカ
4:23-25 (おびたしい病人を癒す) 病気や思い、病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者、あらゆる病人		6:17-19 (おびたしい病人を癒す) 病気、汚れた霊になやまされていた人々
8:1-4 (らい病を患っている人を癒す) らい病を患っている人	1:40-45 (らい病を患っている人を癒す) らい病を患っている人	5:12-16 (らい病を患っている人を癒す) 全身らい病にかかった人
8:5-13 (百人隊長の僕を癒す) 中風		7:1-10 (百人隊長の僕を癒す) 病気で死にかかっていた
8:14-17 (多くの病人を癒す) 熱をだして寝込んでいる、悪霊に取りつかれた者、病人、思い、病	1:29-34 (多くの病人を癒す) 熱をだして寝ていた、病人、悪霊に取りつかれた者、いろいろな病気	4:38-41 (多くの病人を癒す) 高い熱に苦しんでいた、いろいろな病気、病人
8:18-22 (弟子の覚悟) 死んでいる者、死者		9:57-62 (弟子の覚悟) 死んでいる者、死者
8:28-34 (悪霊に取りつかれたガダラの人を癒す) 悪霊に取りつかれた者 [住処は墓場]	5:1-20 (悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒す) 悪霊に取りつかれた人、レギオン [大勢の汚れた悪霊]	8:26-39 (悪霊に取りつかれたゲラサの人を癒す) 悪霊に取りつかれている男、レギオン [たくさん悪霊]
9:1-8 (中風の人を癒す) 中風	2:1-12 (中風の人を癒す) 中風	5:17-26 (中風の人を癒す) 中風
9:18-26 (指導者の娘とイエスの服に触れる女) 死んだ、眠っている、12年間も思っ て出血が続いている女	5:21-43 (ヤイロの娘とイエスの服に触れる女) 死にそう、12年間も出血の止まらない女	8:40-56 (ヤイロの娘とイエスの服に触れる女) 死にかけていた、12年このかた出血が止まらず・・・
9:27-31 (二人の盲人を癒す) 二人の盲人、目が見える		
9:32-34 (口の利けない人を癒す) 悪霊に取りつかれて口の利けない人		
9:35-37 (群衆に同情する) あらゆる病気や思い、弱りはて、打ちひしがれている		
10:5-15 (十二人を派遣する) 病人~癒し、死者~生き返らせ、らい病~清くし、悪霊~追い払う =『平和があるように』	6:6b-13 (十二人を派遣する) 汚れた霊~対する権能=油を塗って病人を癒した	9:1-6 (十二人を派遣する) 悪霊~打ち勝つ、病気~癒す=福音を告げ知らせ
11:2-19 (洗礼者ヨハネとイエス) 目の見えない人~見る、足の不自由な人~歩く、らい病~清くなる、耳の聞こえない人~聞こえる、死者~生き返る、貧しい人~福音を告げ知らされる、		7:18-35 (洗礼者ヨハネとイエス) 目の見えない人~見る、足の不自由な人~歩く、らい病~清くなる、耳の聞こえない人~聞こえる、死者~生き返る、貧しい人~福音を告げ知らされる、悪霊に取りつかれている

(続く)

新谷 光二

マタイ	マルコ	ルカ
12:9-14 (手の萎えた人を癒す) 片手の萎えた人	3:1-6 (手の萎えた人を癒す) 片手の萎えた人	6:6-11 (手の萎えた人を癒す) 右手が萎えていた
12:22-32 (ベルゼブル論争) 悪霊に取りつかれて目が見えず口 が利けない人、悪霊の頭ベルゼ ブル	3:20-30 (ベルゼブル論争) 気が変になる、汚れた霊、ベルゼ ブル	11:14-23 (ベルゼブル論争) 口を利けなくする悪霊、悪霊の頭 ベルゼブル
12:43-45 (汚れた霊が戻って くる) 汚れた霊、悪いほかの七つの霊		11:24-26 (汚れた霊が戻って くる) 汚れた霊、悪いほかの七つの霊
13:53-58 (ナザレでは受け入 れられない)	6:1-6 (ナザレでは受け入れら れない)	4:16-30 (ナザレでは受け入れ られない) 捕われている人=解放、目の見え ない人=視力の回復、圧迫されて いる人=自由、らい病
14:22-33 (湖の上を歩く) 幽霊	6:45-52 (湖の上を歩く) 幽霊	
14:34-35 (ゲネサレトで人を 癒す) 病人	6:53-56 (ゲネサレトで人を癒 す) 病人	
15:1-20 (昔の人の言い伝え) 盲人	7:1-23 (昔の人の言い伝え)	
15:21-28 (カナンの女の信仰) 悪霊にひどく苦しめられ	7:24-30 (カナンの女の信仰) 汚れた霊に取りつかれ	
15:29-31 (大勢の人を癒す) 足の不自由な人、目の見えない人、 体の不自由な人、口の利けない人、 病人		
17:14-19 (悪霊に取りつかれ た子を癒す) てんかん、悪霊	9:14-29 (悪霊に取りつかれた子 を癒す) 霊に取りつかれ、ものも言わず 耳も聞こえさせない霊	9:37-43a (悪霊に取りつかれた 子を癒す) 悪霊が取りつく
20:29-33 (二人の盲人を癒す) 盲人	10:46-52 (二人の盲人を癒す) 盲人の物乞い	18:35-43 (二人の盲人を癒す) 盲人
21:12-22 (神殿から商人を追 い出す) 目の見えない人、足の不自由な人	11:15-19 (神殿から商人を追 い出す)	19:45-48 (神殿から商人を追 い出す)
22:1-10 (「婚宴」のたとえ)		14:15-24 (「婚宴」のたとえ) 体の不自由な人、目の見えない人、 足の不自由な人
24:3-14 (終末の徴)	13:3-13 (終末の徴)	21:7-19 (終末の徴) 疫病
25:31-46 (すべての民族を裁 く) 病気		

(続く)

共観福音書における身障と疾病

マタイ	マルコ	ルカ
26:6-13 (ベタニアで香油を注がれる) らい病の人シモン	14:3-9 (ベタニアで香油を注がれる) らい病の人シモン	
28:16-20 (弟子たちを派遣する)		24:36-49 (弟子たちを派遣する) 亡霊
	1:21-28 (汚れた霊に取りつかれた男を癒す) 汚れた霊に取りつかれた男	4:31-37 (汚れた霊に取りつかれた男を癒す) 汚れた悪霊に取りつかれた男
	3:7-12 (湖の岸辺の群衆) 病人, 病気に悩む人	
	7:31-37 (耳が開かえず舌の回らない人を癒す) 耳が開かえず舌の回らない人	
	8:22-26 (ベトサイダで盲人を癒す) 盲人	
		1:5-25 (洗礼者ヨハネの誕生予告される) 不妊の女、口が利けない
		1:57-66 (洗礼者ヨハネの誕生) 口が開き舌がほどける
		7:11-17 (やもめの息子を生き返らせる) 死んだ、死人
		8:1-3 (婦人たち奉仕する) 悪霊、七つの悪霊
		10:17-20 (七十二人帰ってくる) 悪霊
		10:25-37 (善いサマリア人) 半殺し
		13:10-17 (安息日に腰の曲った婦人を癒す) 病の霊、腰の曲った
		14:1-6 (安息日に水腫の人を癒す) 水腫
		17:11-19 (らい病を患っている十人の人を癒す) らい病

Ⅲ 原因と癒し

身障、疾病の原因の多くは悪霊もしくは汚れた霊によるものとされ、その悪霊の頭はベルゼブルで、また、多くの悪霊レギオンも表れる。特に、一度体から出されて戻って来た七つの悪霊とあり、これに取りつかれた人は最悪の状態になるとされる。口を利けなくする霊、ものも言わず耳も聞こえさせない霊、病の霊などの表現もあり、今日で言う病原菌のように、それぞれの病状に固有の悪霊があると考えていたことを窺わせる。多くの病人を癒す記述で、「熱を出して寝込む、悪霊に取りつかれた者、病人、患い、病」(マタイ)とあり、また「熱を出して寝ている、病人、悪霊に取りつかれた者、いろいろな病気」(マルコ)とあるところから各種疾病と精神病とを区別しているようにも見える。並行記事のルカ4章には悪霊うんぬんは表れない。さらに、湖上をゆくイエスを幽霊と考えたこと、復活の主をイエスの亡霊と思ったことなど、そのような認識があったことが認められる。身障や疾病のみならず、マタイ9章には「弱りはて、打ちひしがれている」との一般状況の記述もあり、イエスはこれらにも同情をよせている。

福音書の記述では、身障や疾病、無気力、塞ぎ、狂暴、狂気等の癒しはこれらの悪霊を追い出すことによってなされた。それはガダラ人の癒しのレギオンなど(マタイ8章、マルコ5章、ルカ8章)に典型的に表れる。特徴的なのはハンセン病(らい病)の場合で、快癒は清くなる、清くされるとの表現が用いられている。これはレビ記13章の症状による清いか汚れているかの基準や続く14章の清めの儀式に発する考え方である。レビ記では「重い皮膚病」¹⁾となっていて、ハンセン病とはされていないが、古い翻訳ではらい病²⁾となっていた。いずれにしても、ハンセン病は特別であって、特に解決されるべき疾病であった。これに罹患すれば、共同体か

ら外され、一人宿営の外で暮らさねばならなかった。レビ記には「隔離」¹⁾という語彙が表れるが、これは病状の変化を観察するためであって、いわゆる感染防止の措置ではなかった。²⁾汚れているとされた場合は、隔離ではなく、前述のごとくいわば村八分、煎じ詰めれば人間失格を意味していた。このことは旧約時代から新約時代に至ってもなお同様であった。

イエスの病気に対する考え方は、一般に因果応報のごとく考えられていた時代に、そのような狭い考え方はとっていない。³⁾そのことは共観福音書ではないがヨハネ9章などから知られる。このくだりは生まれつきの盲人を癒した話で、弟子たちが人が生まれつき目が見えないのはだれが罪を犯したからか、本人かそれとも両親かと尋ねたのに、イエスは盲人であるのは、そのいづれでもなく「神の業がこの人に現れるためである」といっている。現にこの盲人はイエスによって癒された。この成句と続く出来事はイエスの福音の到来として肯定的に受け取らねばならないが、生来の盲人は人生の不条理として、特にノンクリスチャンには受け入れ難い側面も有している。

イエスの癒しには深い信仰と祈りを伴った。このことはイエスの弟子たちの癒しが成り立たないことを評しての「信仰が薄い」(マタイ17章)、「祈りが無い」(マルコ9章)、「信仰が無い」(ルカ9章)とのイエスの言葉から知られる。イエスは祈りと言葉によって、悪霊を追い出し、疾病を癒した。今日、キリスト教界では、教派による違いもあるが、信仰によって疾病が必ず癒されるとの信条は有していない。むしろ、その様な信仰がある種の新興宗教のごとく説かれるとするならば、それを邪教として退ける。しかし、全てを神に任せる信仰は大切にされなければならない。

共観福音書には特別な施術のようなものは表れず、イエスの衣に触れて癒される者があり、

盲人の目に触って癒す、手を差し伸べて触って癒すなどのイエスの行為や、施術らしきものは、弟子たちが油を塗って癒したこと（マルコ6章）、耳の聞こえず、舌の回らない人もイエスが耳に両指を差し入れ、唾をつけて舌に触ったことから癒された場合（マルコ7章）などがあるのみである。前出のヨハネ9章では、イエスが土に唾をし、捏ねて、それを目に塗って癒したとの記述がある。塗油については、ヤコブの手紙5章に「あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。」とあるところからカトリック教会が「終油」のサクラメントとして、これを儀式化したことにカルヴァンは異議を称え、普通の油を塗る以外の何を意味するものではなく、まして臨終に行うべきものではなく、苦しむ兄弟たちのために祈る祈りは空しくないという意味だと述べている。⁴⁾ 前述のマルコ6章の塗油も同様である。

IV イエスの癒しの意味、今日的課題

身障、疾病を人間の罪のゆえに入り込んだ悪魔の業と考えるならば、これらの癒しは悪魔との闘いの勝利に他ならない。これは人間をその罪より解放し、病の結果たる死をも打ち砕くイエスの十字架の勝利、福音の到来を意味する。しかし、その結果として、この世から身障や病気が無くなったかと言えば、そんなことはない。そのような人間の存在、その生の価値については、既に一部を述べたが、バルトは『教会教義学』の中で、生きる価値なしとしてはならないこと、神の秘儀であるとしながらも、社会や国家の悩める肢なのであって、共同体の特別な保護や助力に委ねられたものである⁵⁾と述べている。カルヴァンは『キリスト教綱要』において、生来の盲人についてわれわれは慎ましさを保ち、神をしてその理由を申し開きさせるようなことは努めない⁶⁾と述べている。神への信

頼に他ならない。

イエスはどうかと言うとこの悩める肢を憐れみ、同情を寄せて癒しの業を行った。それは身障者、病者に対する神の愛の具現に他ならない。共観福音書を見る限り、人による分け隔てはない。ただ、カナンの女を癒されたくだりでは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには自分は遣わされていないと差別的発言はなしつつも、イエスはその女性の信仰によって、一度拒否した願いを受け入れられたとの記載がある（マタイ15章、マルコ7章）。小犬も主人の食卓からこぼれたパン屑をいただくのですと女性が信仰を言い表した有名な個所である。

イエスが分け隔てをしなかった実証として、共観福音書において癒しに入れられた者の内訳を挙げる事が出来る。おびたしいとか大勢などの表現が多く、具体的に人数が確認できるのは31名である。その内訳は女性7名、男性5名、性別不明19名である。1名は女性にしか起こり得ない病、長血である。男尊女卑の時代にイエスが分け隔てなく対処していたことが分かる。男女共同参画社会の今日にも範となる状況と言える。カルヴァンも病気の問題にふれ「天上の医師は、全ての者を健康にするための方策を講じようとする時、ある者をより優しく扱い、ある者をもっと手荒い治療によって清めたまうのである。しかし、誰一人として除外されず、触れられずには置き賜わない。なぜなら、すべての人が一人残らず病んでいることを彼は知っておられるからである。」と述べている。病める現代への喜びのメッセージである。

V ハンセン病の場合

旧約時代のみならず、新約時代においてもハンセン病患者は共同体から追放されたことは既に述べた。イエスはこの患者、病をも清め、共同体への復帰を促す。このことから想起するのはつい先ごろ判決を見、日本政府が控訴を断念

したところのハンセン病訴訟である。らい予防法を盾に様々な人権蹂躞が行われた。⁸¹ その実態はハンセン病患者の子供は強制的に学校を休まされたこと、患者の結婚は望ましがらざることとされたのみならず、許された患者の結婚にも、男性は断種（ワゼクトミー）が豚のカストラチオンを行う獣医師によって強制されたこと、子供への子宮内感染は少ないのに、患者の妊婦は妊娠8ヶ月でも帝王切開にてその子供が死においやられたこと等々日本におけるその実態が明かになっている。⁸² 著者もハンセン病は感染率の高い疾病と認識し、隔離の必要性を肯定していたことに内心忸怩たるを禁じえない。それがあつた部分聖書からの知識であつたような気がして慙愧に堪えないのである。

1958年東京において国際らい学会が開催され、新薬プロミンなどにより菌の検出が見られなくなったことから、医学的にも隔離治療の廃止が謳われた。⁸³ それにも拘わらず、日本政府は、世間が受け入れない状況だとして、隔離政策が続けられた。この隔離政策は今日における問題であると同時に2000年前からのテーゼであるだけにその罪は大きいと言わねばならない。

VI 結び

共観福音書における身障、疾病の記述を調べ、そこから得られるメッセージのいくつかを纏めた。キリスト教の倫理における今日的命題は、生命倫理、クローン、生殖医療、老人医療、安楽死、脳死、人口と食糧、福祉介護、環境維持、戦争と平和、核、人権、人間性の回復、AIDS、死と終末等々多くの問題を抱えている。⁹¹ このような大問題の狭間で一般疾病と軽症身障者への対策は地味ではあるが、乗り越えられねばならない切実なことである。これらが神の全能を侵さないように考えられ、実行されなければならない。再び三度禁断の木の実を食してはならない。

文献

- 1) 小平卓保、河井田研朗共訳、Z. イエール監修、(1999) 聖書思想辞典(新版) P. 859、癩病の項、三省堂(東京)
- 2) 土屋博(1995)、私信、レビ記の時代、厳密にハンセン病とは認定できないという。
- 3) 小平卓保、河井田研朗共訳、Z. イエール監修、(1999) 聖書思想辞典(新版) P. 721、病気の項、三省堂(東京)
- 4) 渡辺信夫訳、(1970) カルヴァンキリスト教綱要Ⅳ/2、P. 210-211、新教出版(東京)
- 5) 村上伸訳、(1984)、バルト キリスト教倫理Ⅲ、P. 156、新教出版(東京)
- 6) 渡辺信夫訳、(1970) カルヴァンキリスト教綱要Ⅰ、P. 245、新教出版(東京)
- 7) 渡辺信夫訳、(1970) カルヴァンキリスト教綱要Ⅲ/1、P. 211、新教出版(東京)
- 8) NHKスペシャル(2001年6月6日)、ハンセン病・隔離はこうして続けられた、総合TV番組、NHK(東京)
- 9) 日本キリスト教会時代と宣教に関する委員会編(1987) 今日における宣教と倫理、日本キリスト教会(東京)